

隠遁の思想

西行を
めぐって

佐藤正英

東京大学出版会



隠遁の思想

西行を
めぐつて

佐藤正英

東京大学
出版会

著者略歴

1936年 長野県に生れる。
1958年 東京大学文学部倫理学科卒業。
現在 専修大学文学部助教授。

現住所

東京都世田谷区下馬 1-40-10-502

隠遁の思想——西行をめぐる

1977年 9月25日 初版

検印
焼止

© 著者 さとうまさひで 佐藤正英

発行者 加藤一郎

発行所 財団法人 東京大学出版会

113 東京都文京区本郷 東大構内 電話(811)8814 振替東京6-59964

三陽社印刷・新栄社製本

1010-13021-5149

目次

序章

なぜ隠遁か

漱石『行人』をてがかりに

三

第一章

俗世からの離脱

七

第二章

辺境への往還

二七

第三章

原郷世界の夢想

一九

あとがき

二七

西行歌索引

隱遁の思想

序章

なぜ隠遁か

漱石『行人』をてがかりに

『行人』の主人公である長野一郎は、旅先で、友人のHさんに次のように告白する。

「こうして髭をはやしたり、洋服を着たり、シガーをくわえたりするところをうわべからみると、いかにも一人前の紳士らしいが、實際僕の心は宿なしの乞食みたように朝から晩までうろうろしている。二六時中不安に追いかけられている。情ないほど落ちつけない」(塵勞三)。

『行人』の連載が始まったのは、大正元年(一九一二)である。漱石はこの年四十六歳であった。当時、髭を生やし、シガーをくわえ、洋服を着た紳士が、どれほどハイカラな存在であったかは、想像にあまりある。髭を生やし、シガーをくわえた一郎の举措は、人目を惹かずにはおかなかったであろう。

一郎は、時代の先端を行く存在として設定されている。

一郎のハイカラさは、しかし、当時における最新の風俗にとどまるものではない。西欧近代に身を投げかけ、その全てを受け入れようとする一郎の姿勢の端的な現われなのである。そうした姿勢は、多かれ少なかれ、当時のひとびとに共通するものであり、ひとびとはそこにおのれの在りようを見たであろう。そのかぎりにおいて、一郎のハイカラさは、当時のひとびとにとって、今日のわれわれが

想像するよりも、異和感を抱かずにすんだものであったろうとも考えられる。

その一郎にとって、西欧近代は、おのが身を託しうるものたり得なかった。一郎は、二六時中落着かない。不安に追いかけられている。一郎はいう。

「進んでとどまることを知らない科学は、かつてわれわれにとどまることを許してくれたことがない。徒歩から俥、俥から馬車、馬車から汽車、汽車から自動車、それから航空船、それから飛行機と、どこまで行っても休ませてくれない。どこまでつれていかれるかわからない」(塵勞三)。

西欧近代が保証するところの、輝かしい未来は、一郎にとって、安んじて身を託しうる世界ではない。そこでは落ち着かなさがますます増幅され、拡大されて、不安は恒常化するだろう。ひとびとは不安に馴れてしまい、不安はひとびとの意識にのぼることすらなくなるであろう。一郎にはそのような世界として感得せられている。一郎においては、西欧近代がもたらした進歩の観念は、もはや未来をユートピアとして構築しうる力を失っている。

西欧近代の摂取を無邪気に競いあっている同時代のひとびとのなかにあって、一郎は、いちはやくこのことを感じとっている。ひとびとと一郎との間の異和感は、人目を惹く一郎のハイカラさではなく、ハイカラさの奥にある一郎の落ち着かなさ、不安にある。一見したところ、一郎は、ひとびとと一団になって、ただその少し前を先頭きって走っているとしか見えない。しかし、その実、一郎は、ひとびとよりもさらに一周さきを走っている走者なのである。ともに走っているひとびとは、そのことに気づかずにいる。ひとびとと一郎との間の異和は、そこにある。

そのことが、一郎の不安の告白を、いかにも観念的な、生硬なものたらしめている理由のひとつとなっている。一郎がおのれの実感につき動かされるがままに、それに忠実に語っていることは疑えない。にもかかわらず、一郎の言葉が、ひとびとにとって、剥き出しの観念の羅列としてしか響かなかったであろうことも容易に想像できる。ひとびとにとって、一郎の言葉は、ただの饒舌でしかない。一郎は苛立ち、おのれの実感にいつそう固執する。そのことによって一郎の言葉はますます生硬なものになってしまふ。一郎はこの悪循環から抜け出せないでいる。ひとびとと一郎との間にあるところの懸隔が甚しすぎて、その実感の内実が十全な表現に達するのに必要なだけの余裕が一郎には許されていないのである。

一郎は、そのハイカラさに現われているよりも、はるかに深く西欧近代に親近している。西欧近代との、深いところでの出逢いがなかったならば、一郎の不安はこのようなかたちをとることはなかったであろう。その意味で、西欧近代は、一郎の不安において不可欠の契機となっている。しかし、このことは、一郎の不安が、西欧近代そのものに由来することを意味してはいない。たしかに、不安という言葉遣いそのものは、西欧近代のものである。にもかかわらず、なお、一郎の不安を、西欧近代それ自体のうちに求めることはできない。

一郎は、西欧近代に対して醒めてしまっている。その醒め方が、たとえ観念的な先走りの域を出ないものであったにせよ、一郎は西欧近代に夢を託すことができないでいる。一郎は、そこで夢を見ることはできないと覚悟しつつ、なお、西欧近代に親近するほかに途はないと感じている。そういう一

郎の落ち着かなさは、西欧近代の内面に胚胎する不安とは、その由来を異にするものである。その意味で、一郎の不安を、西欧近代がそれ自体において内包しているところの近代批判をも含めて、西欧近代という枠組みにおいて捉えることはできないといわざるを得ない。

一郎の不安は、西欧近代を前に立ちすくんでいる、一郎自身の在りようをこそ示している。おのが身を全的に投げかけての、西欧近代との出逢いが、一郎の不安を逆に鋭く照らし出さずにはおかなかったのである。一郎の、いかにもハイカラな、西欧近代流の観念に満ちた言葉遣いは、西欧近代そのものに向っているのではなく、あくまで彼自身に向っているのである。それらの観念は、一郎にとって、いわば、おのれの在りようを照らし出す鏡であるにすぎない。

一郎の不安は、だが、一体どのようなものなのか。一郎は、落ち着けないといい、いてもたってもいられないという。一郎はなぜ不安なのであろう。なぜそのようにむやみと焦らずにいられないのであろう。

われわれは、通常、さまざまな事柄やもろもろの行為が、それぞれに意味あることとして存立しているような世界に生きている。それはわれわれにとって馴染み深い世界である。われわれは、それをあらためて事新しく世界として意識することはほとんどない。その必要がないからである。それほどにわれわれはその世界に馴染んでいる。それ故、その世界は、多くの場合、漠然としたかたちでしか、われわれにとって現われていない。われわれは、通常、それと意識することなく、そこにおのれの生の拠りどころを持っているのである。

一郎と同時代のひとびとにとって、西欧近代の進歩の觀念がもたらした未来の世界の像は、いかにそれが驚異的なものであったにせよ、彼らの馴染んだ世界にそのまま連続し、その素朴な延長上にあるものであったのだろう。それは、彼らが馴染んだ世界を補強し、さらに強固にするものと捉えられていたのだろう。従つて、彼らは、西欧近代と全的にあい対する必要はなかった。彼らの多くは、西欧近代を、自在に取捨撰択することのできる部分的存在であると捉えていた。進歩の觀念すら、彼らにとっては、本質的には部分に関わるものでしかなかったのである。

しかし、一郎は、彼らの持つてゐるような、おのれの馴染みうる世界を持ち得ないでゐる。一郎は、おのが生の究極の抛りどころを失つた「宿なしの乞食」である。「自分のしてゐることが、自分の目的になつていないほど苦しいことはない」(塵勞三)と一郎はいう。ここでは、おのが生の究極の抛りどころの喪失は、「自分の目的」の喪失として意識されている。一郎は、おのが一体何のためにこうして生きてゐるのか、なぜこのような在りようをしてゐるのかがわからなくなつてゐる。そのことを痛いほど感じ、そのことに怯えている。そのことが、一郎を落ち着かせないのである。一郎は、おのれの究極の目的がなんであるかを、事新しく確定せずにはゐられない。一郎は、そこまで追いつめられている。一郎は焦らずにはゐられない。

それがどんなに漠然としたものであるにせよ、おのが生の抛りどころを持つてゐると感じてゐるわれわれにとって、おのれの究極の目的は、そこからごく自然に派生してくるものである。それ故、われわれは、通常、おのれの究極の目的をあらためて確定する必要を感じない。それを問うことは、わ

れわれにとって、殊更に事を構える、そらぞらしいことでしかない。一郎の大仰な身振りにわれわれは閉口し、思わずしらせられてしまう。一郎の不安の告白が、われわれにとって生硬なものに響く、もうひとつの理由はここにある。一郎がおのれの馴染みうる世界を失っているということ自体が、われわれにとってかなり異和な事柄なのである。

しかし、一郎にとっては、おのれの究極の目的を確定することは、他のなににもまして切実なことであった。「目的」が確定していない以上、なにをしても、それは「方便」にもならない（『塵勞三』）と一郎はいう。すべてのがあやふやでしかない。いつもどこかに薄ら寒い隙間風が吹き抜けているように感じられてならない。そんなあいまいさから一郎は抜け出せずにいる。一郎はそのことに苛立っている。そうした状態からなんとか遁れ出ようとしている。そして、おのが生の究極の拠りどころ、つまりおのが生の本来の在りようが可能となる場を見出そうと懸命にあがいている。おのれの究極の目的を確定せずにいられないのは、そのあがきの現われに他ならない。

一郎にとって、従って、西欧近代は、ひとびとの馴染んだ世界とは異質の、全体世界でなければならなかった。一郎はそこに「自分の目的」たりうるものを求めた。西欧近代は、おのれの究極の目的をもたらしうるか、という問いをもって、一郎は西欧近代にたいして対している。そのことが、一郎をして、同時代のひとびとよりも一周さきを走らせている。しかし、幸か不幸か、一郎にとって、西欧近代のもたらした進歩の観念は、おのが生の究極の拠りどころたり得なかった。一郎は行きどころを失い、その不安は、いやまずばかりである。

おのれの生の究極の抛りどころはなにかという問いの答えを、他者から聞き出すことはできない。それは、みずから求めるほかないのは明らかである。そのことは一郎にもよくわかっていたであろう。それでいながら、一郎はおのれの不安をHさんに訴えずにはいられなかった。一郎はそれほど追いつめられているのである。

一郎の告白にHさんは不意を衝かれる。Hさんは次のように答える。おのれの究極の目的はなにか、つまりおのが生の究極の抛りどころはなにかという問いは、人間である以上誰しもがなんらかのかたちで直面せざるを得ない問いではないか。きみの不安は、すべてのひとが味わわねばならない不安であり、また味わっているはずの不安である。そうであるなら、きみ一人がそのように苦しむことはないであろう。Hさんは、そういつて一郎を慰める。

Hさんは、一郎にとって、心の許せる、旧くからの親友である。二人は、学生だった頃には、よく議論もした間柄である。「神の存在について云々した」(塵勞三)こともある。そのHさんでさえ、一郎の告白に対して、「頭痛を知らないひとが、割れるような痛みを訴えられた時」(塵勞三)に余儀なくされるような対応しかなし得なかった。Hさんは、みずからの答えが、いかにも生ぬるいものであることを感じないではいられない。

一郎は次のようにいう。自分の不安が人間である以上誰しもが味わうような不安というかたちで捉えられ、論議の対象となるならば、そのとき、それは単なる「頭の恐ろしさ」(塵勞三)にすりかわってしまっているであろう。自分がいま苦しめられている不安は、「心臓の恐ろしさだ。脈を打つ生きた恐ろしさだ」と一郎はいう。誰のものでもあるような、「頭の恐ろしさ」としての不安は、誰の不安でもない。それは不安ですらないであろう。不安は、一郎の「心臓の恐ろしさ」としてのみ存在している。

おのれの生の究極の抛りどころはなにか、という問いは、そうした不安においてのみ存立している。それは、「心臓の恐ろしさ」としてのみ問いでありうる。それが「心臓の恐ろしさ」でなくなつたとき、問いはもはや問いではない。内実は死に、形骸だけになつてしまっている。一郎の告白に接したときの、Hさんの当惑は、Hさんがすでにそのことを察知していたことを語っている。

一郎の問いに対して、われわれが、われわれといひわば一般的な立場にたつて答えを与えようとしても、それは一郎の問いに答えることにはならない。かえつて、一郎の問いを見失うばかりである。だが、われわれは、ともすると、そのことを忘れてしまう。そして、生の究極の抛りどころについての、内実のない、剝製の論議を喋々と語つてやまない、ということになりがちである。しかし、それは、「意味のない口先だけの論理」(塵勞三)だと一郎はいう。一郎はそうした論議の輕薄さに我慢がならないのである。

しかし、たとえどれほど留意しても、それについて論議するかぎり、われわれは、輕薄さから完全

に脱しきることはできないであろう。論議すること自体に、すでに一般論の影が射しているからである。Hさんにせよ、二郎にせよ、『行人』における語り手が、いずれもみずからの軽薄さを自覚した存在であるのは、このことと無縁ではないであろう。

いずれにせよ、このことは、一郎の問いに対するわれわれの近づき難さを端的に語っている。一郎の問いそのものが、われわれの安易な接近を鋭く拒絶しているのである。この拒絶の上にこそ、一郎の問いが問いとして存立しうる場があるのである。

一郎の問いが、Hさんの指摘するような一般論に還元しうる部分をもっていることは疑えない。だからこそ、たとえ軽薄でしかあり得ないにせよ、われわれは一郎の問いに近づきうるのである。そのことは、しかし、一郎の問いを、誰しもがなんらかのかたちで出逢うところの、おのれの生の究極の拠りどころはなにかという問いに還元しうることを示すものではない。問いがそのような次元に還元されたとき、一郎の問いは問いとしては死んでしまう。そこにこの問いの厄介さがある。

ならば、いっそのこと、一郎の問いに取り合わずに、それをそのまま一郎に押し返してやればいいのではなからうか。そうするほかに途はないのではないか。それは、一郎の問いを不用意に受け入れ、安易に答えうるとする対応よりも、はるかに賢明であるように見える。

一郎の問いに対して、われわれが、それはあなた自身の、あなただけの問いである。従って、あなたが答えるほかはない、といって、その問いを一郎に押し返したとしよう。その主張それ自体には、格別の誤謬を見出し得ないかもしれない。それは一見無難な対応のように見える。しかし、その実、